



果は、で、木の上にくだものになっている形を表わした字です。“くだもの”が本義の字です。種が芽を出し、木になり、花を咲かせ、最後に実を結びます。だから、果は“最後”“はて”の意味に用います。また、“はたす(仕とげる)”という意味にも使います。「結果」は、“実(果実)を結ぶ”という意味の言葉ですが、“原因に引き継いで起こること”の意味に使われます。仏教では、この“原因結果”を簡単に「因果」と言っています。「果報は寝て待て」の「果報」は、因果応報の意味で、“よい因をなせば、求めなくてもひとりでによい果となって報いられる”ということですが、今では良い因をなすことが忘れられて、果報が、単なる“幸運”の意味に取られているのは残念なことです。

菓は、果が、“はたす”など別の意味に転用されるようになったため、“くだもの”を表わす字として、新しく作ったものです。

「菓子」は、“くだもの”の意味のことばですが、今ではケーキ類の名称になってしまいました。今でも、「水菓子」という言い方は残っています。

課は、“はたす”意味の果と言との会意形声字です。“仕事を果たすよう言いつける”ことが本義です。「課題」は、果たすように言い

つけられた問題ということです。“仕事を割りあてる”こと。また“割り当てられた仕事。日課。音は果。

夥は、“果実が多く木になっている”という意味の字で、広く“物の多い”意味に使われています。おびた^カしい。音は果。

顆は、頭の意味の頁と果との会意形声字。“頭のようにまるい果実”という意味の字です。音は果。

踝は、足首の両側にある、果実のように丸くふくらんだところ“くるぶし”を表わした字です。音は果。

裹は、果実を着物(衣)の中に“つつむ”ことを表わした字です。裹という字に似ていますが、全然違います。“つつむ”こと。音は果。

裸は、つつまれていた(裹)果実が着物の外に出ている形ですから、“むき出しにする”という意味になります。転じて、今では、着物を説いて“はだか”になる意味に使われているのは、ネのついた字だけに当然のことでしょう。音は果が変化してラになりました。裸体。

「裸子植物」は、松、杉などのように、胚珠が子房で包まれずに、外に出ている植物のことです。「被子植物」に対するものです。